

藤原宮外周帯の調査

—第191次・第192-7次

1 はじめに

本調査は農業用水路改修にともなう事前調査である。調査地は、藤原宮南面外濠と六条大路の間にある外周帯と呼ばれる空閑地にあたる。周辺の調査では、第29-6次調査で藤原宮南面外濠SD501を（『藤原概報 11』）、第168-9次調査では西一坊坊間路東側溝の可能性のある溝SD11069を（『紀要 2013』）確認している。これらの成果から、本調査区でも藤原宮南面外濠の一部や先行西一坊坊間路が検出される可能性が想定された。調査は2016年度（第191次）と2017年度（第192-7次）の2回実施しており、あわせて報告をおこなう。

調査区は、改修する水路に沿って設定した。第191次調査区は、全長137.0m、調査面積は635.7㎡である。2017年1月10日に開始し、2月2日に終了した。第192-7次調査区は、全長88.8m、調査面積は182.0㎡である。2017年11月27日に開始し、12月15日に終了した。

2 検出遺構

基本層序 本調査区の基本層序は、①表土（30～70cm）、②水路関連層（20～40cm：現代～近世までの水路掘方や埋土等）、③茶褐色粘質土（5～30cm：古代の整地層）、④青灰色シルト（15～30cm：古墳時代以前の自然堆積層）、⑤黒灰色粘土（弥生時代以前の沼状堆積層）の順である。調査区内は水路による削平が著しい上に、東西に細長いため、層位は一定しない。加えて、Y-17,823からY-17,941までの調査区北側は旧埋設管の掘方によって大きく壊されている。

古代の整地層とみられる③層は、Y-17,900以西、およびY-17,755からY-17,810の範囲では平面で残存しており、この上面で遺構検出をおこなった。Y-17,811からY-17,900の範囲は、水路により③層が削平されていたため、②層を掘り下げると④層が露出する。ただし、④層は調査区全体には広がらず、Y-17,810からY-17,900の範囲で確認した。⑤層は、第191・192-7次調査区全面に広がる弥生時代以前の沼状堆積層である。Y-17,755以東は水路や後述する自然流路NR11458により

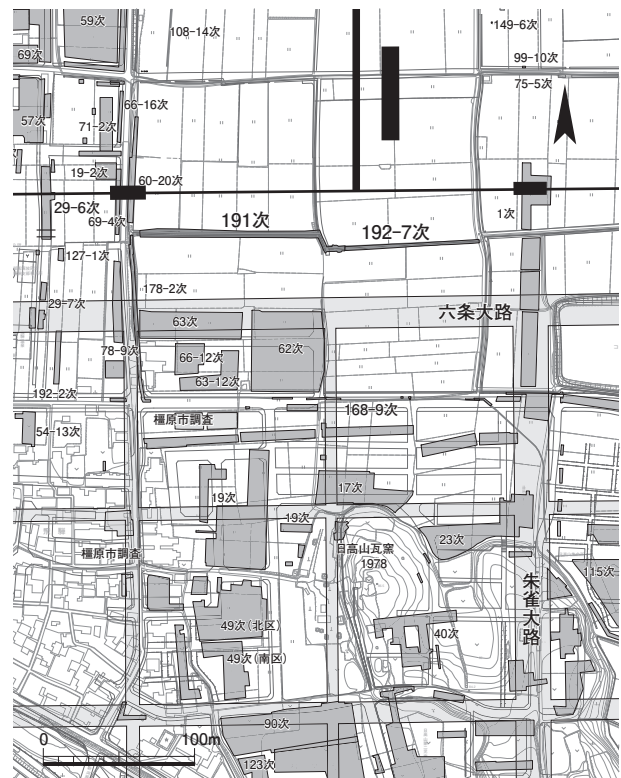


図96 第191・192-7次調査区位置図 1：5000

大きく削平されており、②層を掘り下げるとすぐに⑤層が露出する状態だった。なお、遺構検出面の高さは、第191次調査が標高72.3～73.5m、第192-7次調査が標高73.5～73.8mである。

藤原宮造営期・藤原宮期の遺構

東西溝SD11450 第191次調査区西部で検出した（図98・100）。後述するSD11451と重複し、北肩が調査区外にあるものの、本来の幅は1m程度と推測できる。残存する深さは30cmで、底面の幅は30～80cmを測る。蛇行しており、自然流路の可能性もある。埋土からは飛鳥ⅢからⅣの土器や藤原宮所用の瓦が多く出土した。

東西溝SD11451 SD11450が埋まった後に掘り込まれる溝である（図98・99）。幅1.2m以上で、残存する深さは20cm。SD11451は東に向かって北に振れ、Y-17,918付近で調査区外となる。

SD11451は、調査区から約60m西に位置する第29-6次調査区で検出した藤原宮南面大垣外濠SD501と位置が合致する。このことから、外濠の南肩もしくは外濠埋め立て後の落ち込み等の可能性がある。埋土からは藤原宮所用の瓦が出土した。

落ち込みSX11459 第191次調査区東部の南壁で確認した。この周辺は西一坊坊間路の先行条坊推定位置にあたるが、水路の削平により、古代の遺構面は残存していなかった。しかし、西一坊坊間路東側溝推定位置から約2

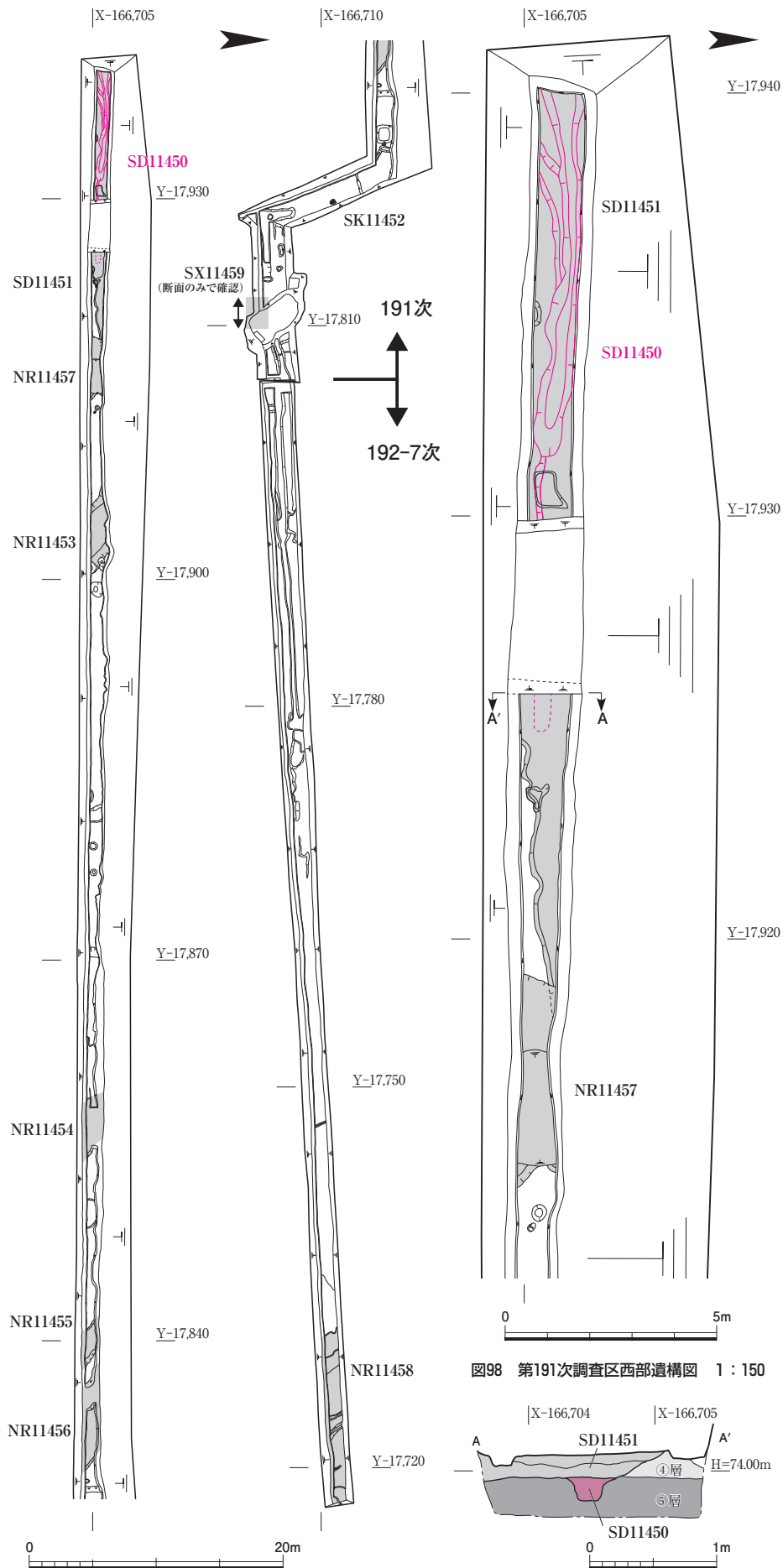


図97 第191・192-7次調査区遺構図 1 : 500

図98 第191次調査区西部遺構図 1 : 150

図99 SD11450・11451断面図 1 : 50



図100 SD11450検出状況(西から)



図101 第192-7次調査区全景(東から)

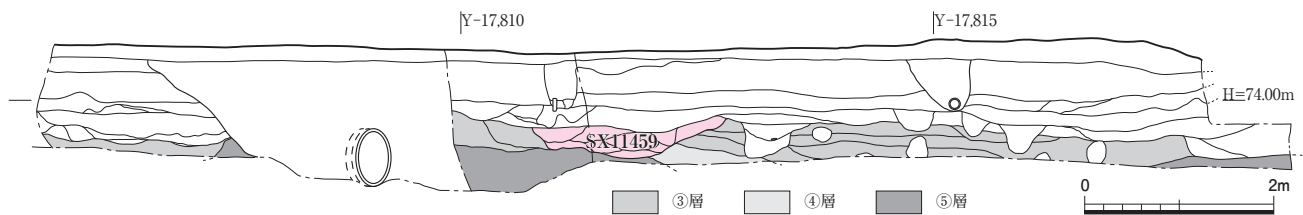


図102 第191次調査区東部南壁土層図 1 : 80

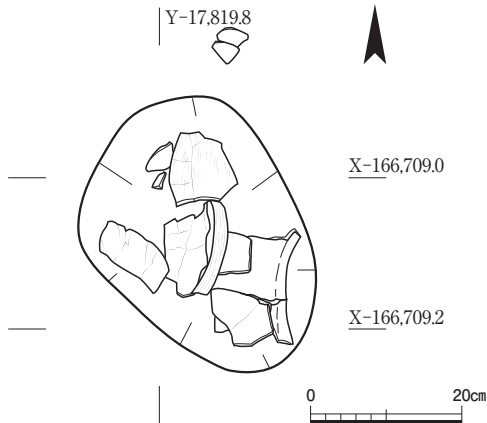


図103 土坑SK11452吉備型甕出土状況 1 : 10



図104 自然流路NR11458検出状況 (北東から)

m東の位置で、溝の可能性ある落ち込みを南壁土層で確認した(図102)。幅約2.0m、残存する深さは約30cmである。ただし、反対側の北壁土層では旧埋設管の掘方により古代の土層は失われており、SX11459を条坊側溝と断定するには至らなかった。また西一坊坊間路西側溝はすでに削平されていた。

古墳時代以前の遺構

土坑SK11452 第191次調査区東側の④層上面で検出した(図103)。径約40cm、残存する深さは約5cmである。埋土から庄内式期の吉備型甕が意図的に破壊された状態で出土した。

自然流路NR11453 第191次調査区Y-17.905付近の④層上面で検出した。旧地形に沿って、北西方向に斜行する。幅約5.5m、深さ25cm以上を測る。

自然流路NR11454 第191次調査区Y-17.855付近の④層上面で検出した。北西方向に斜行する。幅は約4.8m、深さは約40cmである。なおNR11454の下から、⑤層を掘り込む幅約4.2mの溝の可能性ある落ち込みを南壁土層で確認した。

自然流路NR11455 第191次調査区Y-17.840付近の④層上面で検出した。北西方向に斜行し、幅約3.0m、深さ40cm以上を測る。

自然流路NR11456 第191次調査区Y-17.835付近の④層上面で検出した。北西方向に斜行する。幅4.8m以上、深さ約30cm。近現代の攪乱土坑に西肩が壊される。埋土から弥生時代後期から古墳時代初期の土器が出土した。

藤原宮廃絶後の遺構

自然流路NR11457 第191次調査区Y-17.915付近で検出した東西方向の自然流路である。③層を掘り込む。幅約5.0m、深さ30cm以上を測る。埋土から、飛鳥ⅣからⅤの土器が出土した。

自然流路NR11458 第192-7次調査区東端で検出した。幅16m以上、深さ約50cm。旧地形に沿って北西方向に斜行する。少なくとも2度にわたる洪水層の上に、細砂の流路層が確認でき、断続的な土砂の流入が認められる(図104)。最下層から近世後期の土器が出土した。(石田由紀子)

3 遺物

土器 弥生土器、土師器、須恵器、近世陶磁器などが、整理用木箱に6箱分出土した。大半が水路関連層である②層からの出土である。以下、自然流路、および④層出土品について述べる(図105)。

1~5はSD11450から出土した。かえりを有する杯蓋(1~3)や高い高台の杯B(4)など、須恵器が飛鳥Ⅲの様相を示す一方で、二段放射暗文を施した土師器杯A(5)には、口縁端部の形状に飛鳥Ⅳ以降の特徴が現れている。6はNR11456の埋土下層から出土した土師器杯Cで、一段放射暗文や径高指数約22という数値から、飛鳥ⅣないしⅤに位置づける。7は、SK11452からの出土で、庄内式土器並行期のもものと目される吉備型甕。8・9は、NR11455から出土した小型の深鉢型土器である。直接接合はできないものの、折り重なるようにして出土

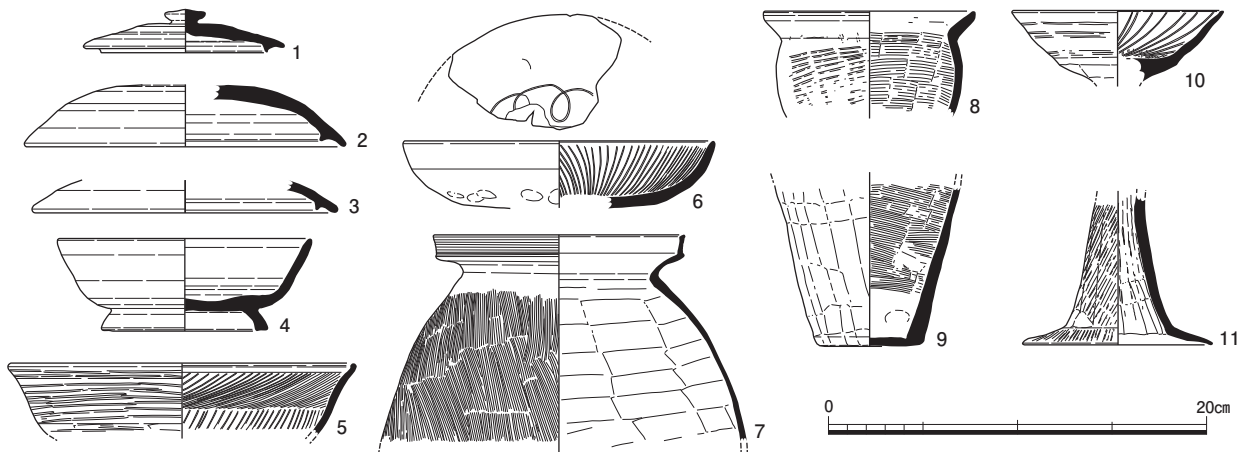


図105 第191次調査出土土器 1 : 4

表19 第191・192-7次出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	種 点数	型式	種 点数	種類	点数
巴(近世)	2	6647	C 1	ヘラ描き丸瓦	1
		不明	1	ヘラ描き平瓦	3
				面戸瓦	4
				鬩斗瓦	4
				隅切平瓦	1
				隅木蓋瓦	1
				瓦製円盤	1
				土管(中世)	2
				丸瓦	
				平瓦	
重量	34.5kg			92.3kg	
点数	492			773	

しており、胎土が酷似していることから同一個体とみてよからう。口縁部の形状や胴部外面の上部に残るタタキ成形の痕跡から、弥生時代後期のものと考えられる。なお、NR11455の出土品には、布留式の土師器甕の小片を含む。10・11は、④層から出土した古墳時代の土師器高杯。10の杯部内面には、放射状に粗いミガキを施す。

(尾野善裕)

瓦磚類 第191・192-7次調査区から出土した瓦磚類を表19に示す。特にSD11451からは軒瓦は出土していないものの、丸・平瓦や鬩斗瓦等、多くの瓦が出土した。これらは製作技法や胎土等から藤原宮所用と考えられる。ただし、平瓦は凸面のタタキ調整が縦縄タタキのほか、平行刻線タタキが目立ち、縦縄タタキで統一される宮中枢部とは様相が異なる。平行刻線タタキは、五條市牧代瓦窯や讃岐宗吉瓦窯、淡路土生寺瓦窯等、奈良盆地外の遠隔地の瓦窯で生産された瓦の特徴であり、これらは主に大垣に用いられる傾向にある。したがって、SD11451出土瓦には、藤原宮南面大垣に用いられた瓦が含まれていると考えられる。

(石田)

金属製品・木製品ほか 近世以降の水路堆積土中から、銭貨8枚、煙管、加工木、燃えさし、モモ核、砥石、獸



図106 第191次調査区水路下層出土の天保二朱判 2 : 1

骨などが少量出土した。銭貨の内訳は、寛永通宝5枚、天保二朱判1枚、竜一銭銅貨(明治18年発行)1枚、銭種不明1枚であり、水路機能時の年代を示唆する。獸骨はニホンジカの脛骨(左)の遠位端が出土しており、骨端の癒合が完了しているため成獣と判断できる。

天保二朱判(図106)は、重量1.655g。蛍光X線分析の結果、表面の金色部分では金約54%、銀約45%、銅0.22%前後(wt%)であったのに対し、金色の剥離した銀色部分では金約37%、銀約63%、銅約0.21%(wt%)という結果が得られた。後者の値が規定品位に近似しており、表面の色揚げがおこなわれたことがわかる。

(廣瀬 覚・山崎 健・降幡順子/京都国立博物館)

4 まとめ

今回の調査では、水路による削平のため遺構の残存状態は良好ではなかったが、藤原宮南辺の様相の一端を知ることができた。また、弥生時代以前の沼状堆積層の広がりを確認したことは、藤原宮造営前の当該地の旧地形を考える上で大きな参考になる。藤原宮の造営に際しては、このような軟弱な地盤を大規模に造成し、利用可能な土地に改良していったことがあきらかになった。

また、近世後期の自然流路NR11458は大規模な洪水にともなうものであり、今後飛鳥・藤原地域の災害史を分析するための基礎資料になると思われる。

(石田)